2023_1224「タケの開花（写真）」日々の理科 3426 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

10 月下旬、お茶の水女子大学構内にある子ども園の裏庭に「タケの花」が咲きました。毎日当研究所の前を、子ども園の園児を連れて歩く先生が教えてくれて、すぐに見に行ったのです。タケの花を見るのは初めてでした。それもそのはず、タケの花はおよそ 120 年に一度、それも、一斉に咲くことが多いからです。ヒトの一生では一度も出会わないこともあるでしょう。

日本のタケは主に３種類あります。モウソウチク（孟宗竹）、マタケ（真竹）、ハチク（淡竹）の３種類です。見分けは、節の形状で比較的簡単にできます。子ども園のものは「ハチク」とわかりました。ハチク（淡竹）は「呉竹（くれたけ）」とも呼ばれ、最も実用性が高い有用種と言われています。花は思った通り地味でしたが、実に凄まじい数が咲いていて、しかも１２月下旬になっても咲き続けていました。

昨日配信した「タケの子房にいた虫」は、当研究所の先生が調べてくれて、「ササノミモグリバエ（笹の実潜り蠅）」という非常に特殊なハエの幼虫の可能性が高いとわかりました。研究論文も見つかって、更に、このハエの幼虫に寄生するハチも存在するとわかりました。タケの花が一斉に咲くのは、この幼虫の害から全滅するのを防ぐための防衛手段という説も紹介されていました。

タケは開花後に枯れると言われますが、ハチクは地上部だけが枯死し、地下茎は生き残るのだそうです。今後も引き続き観察させてもらおうと思っています。

（2023 年 10 月下旬／お茶の水女子大学こども園内）